



170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8 9 190 1 2 3

貴
14
3163
101(1)

あひひ乃もとたはせん櫻室の身との別を
赤のたるこをやくすすめにわらう
ゑども従う是成ゆのーまちんき漢て朝を今
船の集はせ門の出でじそくにまことのせり
はゆる、あだとる京極黄つのひう
つりに此集と父乃妻ふるをアみあひーわ
からすく心あざめ品れむをーとかやる
るよさとくにひうて引きひがひーいじや
やまとの一姫ーあ神代より傳りて性と連

首

三才集

やうをすつまひてあむ一うる
二十一代乃わのれまく玉とくくゆま
とくとくうひをあはる事やほづわ
中もぬ乃がくい人の心ひもとをえお言葉
の声乃ひしむまひやさーきさは玉集小
こを侍きばゆえや宗祇法師もよす居の
座右とおむく秘教をくわーとゆきき人の
けうとき業もいつてきさんもの御教をも
がすの身をほまびまとまくとせんを

楊政大政大臣

「其御内院御宇

春三首夏三秋土冬ニ賀ニ恋十四雜ハ神一釋一

武子内親王

「後白川院亦三之皇女音齊院十号

宮内卿

「後白川院官女也

俊成卿

「春二秋四冬一恋一雜一

御堂廬白道長四代孫權師中納言俊成子也

讀人不知

「春三夏ニ秋ニ賀一

春二夏一賀一恋十九神一

權中納言國信

「春一未考

山邊赤山

「赤人和歌之秘事也以不詳當入深

家隆

「太宰權師光隆子森蓮法師之尊也

春一夏一秋三冬ニ旅六恋四雜六

仲實

「藤原氏後鳥羽院ノ御宇人

春一

家持

安丸孫大伴氏太宰少貳^{トモシ}經仕陳眞守
春二忘二

藤原秀光

佐藤攀太秀禰十代孫四條院仁治元年卒
春二秋二冬二衰一旅一忘三雜二

西行法師

房前大臣深海公十三代孫藤原唐清子
春二夏三秋四冬五旅三忘二雜十四神一歌一

源宣之

貞元親王四代孫相摸守十号ス
春一冬一忘一

慈円

諱道族天台座主法性寺忠通公子早吉水薦
春二夏二秋五冬二衰一旅二忘六雜十六神六寂八

大上天皇

春二秋二冬二衰一旅一忘二神二

定家

從二位山家号明靜
春四夏三秋二冬二衰一旅六忘十二雜三歌一

宇治園白

春一
俗名定長俊頤子
春四夏一秋三冬賀一忘四雜一歌十

寂達

春一
俗名定長俊頤子
春二秋二冬二衰一旅一忘二神二

行慶

春一

伊勝

右大臣内齋月野尤祖真夏四代孫伊勢守
春一夏一忘四釋一

士生忠峰

府主立至亟忠衛力子楊津國大日
春一
飛鳥井先祖歌鞠達人京極師寅五代之孫

雅經

府主立至亟忠衛力子楊津國大日
春一
飛鳥井先祖歌鞠達人京極師寅五代之孫

有家

府主立至亟忠衛力子楊津國大日
春一
飛鳥井先祖歌鞠達人京極師寅五代之孫

能因法師

後鳥羽院時人号大藏卿
春二
搞諸兄公子奈良丸八代孫俗名長門守永燈

源具親

後堀川院御宇号内大臣
春一
搞諸兄公子奈良丸八代孫俗名長門守永燈

德大寺龙光臣

大欲御内右大臣公能子息号龙大臣實定
春一
搞諸兄公子奈良丸八代孫俗名長門守永燈

藤原保經

後堀川院典侍定寂女
春一
未考

民部卿

御堂園白孫俗名家子也二条家和歌之祖
春一
未考

基後

御堂園白孫俗名家子也二条家和歌之祖
春一
未考

荒木田庶長

復一
未考

東宮權太輔

足野之宮龙大臣 德大寺一民
复一
龙京太夫顯輔力子續詞花集撰者

清肺

复一
龙京太夫顯輔力子
源俊賴子

俊惠法師

秋三
新古今作者五人肉也

通具

秋一
大江育人六代孫信濃守成衡子
新古今作者五人肉也

顯照

秋一
大江育人六代孫信濃守成衡子
新古今作者五人肉也

小糸

秋一
大江育人六代孫信濃守成衡子
新古今作者五人肉也

前中納言匡房

秋三雜一
宇太天皇第九皇子敦實親王四代孫
新古今作者五人肉也

大翻言經信

秋二雜一
宇太天皇第九皇子敦實親王四代孫
新古今作者五人肉也

曾祢好忠

秋一
寬和頌人仕丹波守
新古今作者五人肉也

人丸

性不詳
秋二冬一旅一志二雜一
新古今作者五人肉也

和泉式部

上東門院女房大江育人六代孫
新古今作者五人肉也

俊成女

秋一冬一春一雜三
性俊成婦之所詳也

通光

秋二冬一旅一志五雜三
後深草院御時ノ仁也宝治二年正月薨
新古今作者五人肉也

坂川院

秋一
大孫王四代兵庫守仲政力子
新古今作者五人肉也

源三位賴政

秋一
藤原氏龙京大輔顯輔力孫有家ノ文
新古今作者五人肉也

鴨長明

秋一
順健院延暦九年鎌倉下向同合官氏
新古今作者五人肉也

龙京大浦

秋二
房前大臣ノ御子莫名十二代修羅太夫顯李子
新古今作者五人肉也

道因

秋一
權中納言秀輔六代孫俗名敦頤後出家
新古今作者五人肉也

二條院讀占

源三位類政文
秋一冬一雜一新一

堀川院御宇藤成严力子

中院公經

秋一冬一

允河内良道

秋一未不考

藤原資宗

冬一後自川院御宇人

家經

冬一

俊賴

冬一大納言經信之子息
冬一寒一雜二

成茂

冬一良運

冬一未考
冬一被園別當其姓不詳

湯原王

冬一

上東門院女房越前守為時亨

紫式口

冬一表一離一雜一

國房

冬一未考

隆季

冬一

仁德天皇

應神天皇才四皇帝
賀一

範魚

未考

浦親

賀一

照光

未考

僧正遍照

賀一

植武天皇才四冬嗣公孫宗貞達名遍照
在魚葉平

阿保親王才四ノ御守在五宇將卜占又
衣一忘二

中納言西情

離一忘一
三条家左牛将利基男

大江嘉吉

哀一未考

加賀左衛門 一
雜一 未考

光明天皇

人皇四十三代女帝也

難武天皇

旅一

人皇四十五代文武帝之皇子

女御 滅子

旅一 未考

橘為仲

旅一

白川院宿 徒二年九月卒主嚴頃圭我匾子也

宜秋院丹後

旅一

顯仲

旅一 具平親王三代孫

藤原時凡

正六位道成力子

謙德公

意一 一条方政伊尹公也

藤原尤真

意二 九條右丞相師輔公一男

藤原實方

一条院長治四年十一月十二日與列薨定時

大殿涉口左太卜

意一

前大納言忠良

近衛栗田口忍相

馬内侍

一条院御守人丸馬頭時明女

麥謙皇

意一 敏達天皇王子七代孫

菅贈大政大臣

雜三

花山院

人皇六十五代涼泉院第一皇子

大納言忠家

雜一

大納言忠教

京極源實子飛鳥井先祖也

源師光

雜二

新古今

幸清

雜一

八條前大政大臣

雜一

藤原方胡卜

雜一

增基

雜一

入道覺性

雜一

行通

雜一

早忠藏

雜一

安法之师

雜一

如道見

雜一

藤原清正

雜一

村上天皇天德二年七月葬高倉院比人原曰朱子也

後朱雀院

雜一

因防内侍

雜一

白川院女房閨防守繩仲女

友近伊將

雜一

未考

加文房李保

雜一

神藏不知其姓

藤原行能

雜一

後協川院，讳字人

源季景

雜一

前大將頼朝

雜一

清和源氏八幡太尉四代孫任征位將軍

藤原通信

雜一

恒德公子也正曆五年卒

小野小町

雜一

崇徳院 —— 鳥羽院才一皇子 人皇七十五代ノ帝也

雜一

土御門内大臣

雜一

義教同三司母

恩一

吏衣深固子

未考

赤除石鷲

一条後清守赤除時用女

藤原通經

仁明天皇少子迎閣右大臣

小侍長

烹一雜一耗一

清原元輔

你養支孫暴光男

安達之作女

烹一 安達之師性有前

延喜侍門

烹一

入道前内白

御堂内白五代孫忠通公

龙虎

猪家通

近閣内白

後松川元仁元年卒入

殿富田代大史

後白川院昇

八条院高倉

烹一雜一 信成女

相摸

順德院某久三年三月流射鳥
或說相摸守大江公資女

弁

鞅一烹二 信定女

川嶋皇子

天地天皇子也

後冷泉院

後朱雀院才一皇子

大藏三位

雜一 紫寧ノ子父太馬鹿宣孝徒衣任考

家譜

雜一

知足院前奥白 御蒙奥白五代孫忠實公也父二条實白平道

雜一

行平 平機天皇之子阿保親王才一之傳子

二条寅白

雜一

赤坂殿四代孫

中務

雜一

赤坂殿四代孫

行平

雜一

舒明天皇之子

天地天王

雜一

慈惠大師之門赤橋恵平力子

増嫂夫人

雜一

慈惠大師之門赤橋恵平力子

東三条院

雜一

后之陵号自此初至金後長保三年崩又

涼泉院

雜一

人皇六十三代村上天皇才二ノ皇子

批把皇太后宮

雜一

上東門院

雜一

一条院之后才二ノ東比院

天曆

雜一

西宮前大倉

雜一

神歌

神祇二

住吉 加茂

三統理平

同

中院入通

同

加茂辛平

社同

同人皇七十二代後三条院皇子

貴之

同

紀文韓子古今撰者之據采

侍教大臣 | 天台祖師故巣向山 | 補一

日藏上人 |

朱雀院之佛宇ニ闇庵圓ヨリ歎ニ成也

大納言敏信 |

新一

肥後

新一

經家

新一

圭糸覺

新一

寂然

新一

源平廣

新一

源信

新一

俗姓大加國伊人役穀子号ノ恩信僧也

新古今和欽集新鈔

春序上卷一

会立あらとよきゆふきる

楊政大政大臣

○見う野山もすく白雪のうけに里にまはまふう
ううりゆうううて西やくがううハ春色むくくと
れぐへ。それと天不該。そ四時。とくとくう本
處のとくがううう雪のうすを毛色ハヌとくゆう也
ぬふく見極軸也。巻頭のうあれば筆との間あな
まくへ。まちを一絵の巻紙よとけつ心ひ一筋の
内よ絶景の心を含めり。か文字より。ううみ



里にいよよ。ち今之二字と云ふ事とぞよろこ
ちかの事のまひ心あり。詠みの、こ雪の上にくさ
てたる初春のあつね。——。本ち
本あ後ともものひらはわむきよゆきのよひをす
又ありけり。里とつねどり。いは雪居の松竹を古
づとよなり本すハ

日
足す山の白雪。——。夜そじく成らうなり
やうをかりけり。里とよむろハ

式子内親王

○春と春とをきらぬれのよし。——。かう雪のなす水
初春のぬきぬくよし。——。かく水心も

まく絶たうてわうもんとお風情や。——。
はよくのハ母のさうをきく。——。つがひく。——
きくへんうく。——。うちもるをもゆ。——。春の春。——
外とくから伊川とれく。——。雪のあくほり。——。
まくともあらまく。——。さすよ。——。のまけ
のわをもうぐいに。——。つきく。——。あく。——。紫
ゆうぐ。——。せのと。——。あく。——。れく。——。深
よの。——。のう。——。けよ。——。と。——。宮の。——。
もくは深山幽谷。——。きくわく。——。きく。——。もあく。
さじため。——。まく。——。きく。——。きく。——。もあく。
とたとのまく。——。まく。——。秋。——。きく。——。きく。

官内

○此處へ一程も里の雪のうらにかくさぬまがまか
はくしよどくねどくわまのうとせうとすよと人達
のうあり。雪中に人の足へうるさくねづあちを
まさんよさうとなり
○よ人ひなき高あたてうまひをじよびはくさぬまがまか

後成

○まだいそりあへゆくじまをかよのうとひげられ
きくらやめにはまのあまゆくはうとさく
あくとくわくうりとむよひうわくらざく

後人一

○此處へ今まふ成めと雪あうとせうとひはくさぬまがまか
はま、とととて今まふ成めとせうとひはくさぬまがまか

きひ(ア) 露たふまくはまくうくうく

橋中納言因信

○まほれ下まくつるまのと母はきれくみゆつ春のあま
あく雪とはあくかく清やかと雪といつ
あくはとつきのくにゆうとよ車公下前の車
車のとくのくわくと清雪をとさきあらまよ
車のくわくとソノとまくとつきあらこつまは
のくわくとソノとまくとつきあらこつまは
一すばくとくとく。一みがまくひたとくとくとい
つとくあくまのとくのあく雪のうりゆくう
まくひくひくとくとくとくとくとくとくとく

山色赤人

○ひすくはづれほじまめり聴み耶日を今朝も雪ばかりで
あめ野に絶へうすかあすくは毎日おまえ
お心地とのよきよよもとつむじく心ゆく
あくあすつましとソヒルヒカマクアムアム
けく

家作

○谷川のうち野はまよひのゆきのやうう勢
古今の二首とりとあるもまくすめうき也
書谷川のうきつ冰のひくふらうぬくはまのくはれ
日^ノ花のうきのたよりにまよひのうきよまくよひやふ
たよ川の冰をもととすくあくとくにぎふく
ひよきをひくとまのうきよひくめうきなり

仲實船

○まきくい花とさくわくさくねのうへまにあひ雪うさう
まくくはもととくよとがきの雪と舞一、まくは
もとまくすうとくにまくはまくはとくねの
雪と舞一とくやく、又花とまくねの雪よあくと
かく、まくはもとまくすうとくねのうまく一、春の花とまく
まくくまくぬまくと霞のゆよじかくうなづく、春
の花とまく

家持

○来向のひづれもまくくまくぬよかねうふにあそ雪うるれ
ぬくくの様紙大和の名前せばう小春の向す
いよくくまくぬまくと霞のゆよじかくうなづく、春
の花とまく

よゑきくを

○今冬は雪やうめやと、うとう方あらうまをかうむり。西代
雪あらうめやと、雪やうめぐをとくうめたらうとじせ。
うけうまあ従ありとむぐうと、お越なとゆく
うれどもとアリ。ゆくとくゆくとくゆくとくゆく
りゆくほうへとゆくとあれと陽極のアリ。ゆく
きゆくまるとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく
ト。とむりへぞ雪のうととゆくとゆくとゆく

藤原秀能

○山飛来まみちく。都殿にのまのつる巣とゆく白浪
はえ文字。春の月のかうろりとくう。八月の光
をとやくらぬものなり。八月飛来水鳥のふき

○海つたねのと雷とよまつは游行の水を。——浪
の音のやうとよまつとこゆるはとく。タード
みちく。とがくとたうとく。とく。とく。とく。とく。とく。
とく。月のうづからを白浪のこまくとく。とく。
とく。とく。とく。とく。とく。とく。とく。

西行法作

○海つたねのと雷とよまつは游行の水を。——浪
はまゆく。きく。たう。と
はまゆく。はまゆく。はまゆく。はまゆく。はまゆく。はまゆく。
はまゆく。はまゆく。はまゆく。はまゆく。はまゆく。はまゆく。
はまゆく。はまゆく。はまゆく。はまゆく。はまゆく。はまゆく。

心はけむしをあすり。まごとのこゝとハつまくのむ
されよ。とくに。アリケヨウトハ。とくに。それと
清流きよりゅうとある。山さんが下の白浪しらなみと山さんの賛仰さんぎょ也。
どうぞ春はるのあり。雪ゆきのそゆ。阿あづかのうらのうちも
清流きよりゅうに、さきよみのたより。清流川きよりゅうがわのあられぬあり
たり。とくに。りくに。ふたうねの雪ゆきを行ゆくの水みずも。
御ごとけ尊そんそく。りきもり。心こころ也。眼まなこあ。辨べん也。
通食つうじきか。すうたけの雪ゆき。此こをさうく吹ふき速はや院いん傳つた

ちの風の風の風の風の風の風の風の
空氣の空氣の空氣の空氣の空氣の空氣の空氣の
やうな。それからまたやうな。よくよく
よくよくよくよくよくよくよくよくよくよく

従わず
ひそかに
跡せんじて
ひつり

源重之

卷之三

○秀次富士見のまつまのまよがくへあけうのまつ

あひの東は春をつやうる天よりとす人をよ
めりてのきの。お天よりのゆりう
もくやまか同心して春のきよ盛なりとす
二の句をくそりへらふも也

太上天皇

○ヨウセハシモシムニシテハ秋とされひがん
モハ秋の春也。トシテハ秋なり。おす能い居也。古人
秋のタメテキシテヒツテアリ。もぐれを
まのタメテキシテヒツテアリ。もぐれを
たまわる無のあり。せよしたくひく
あくれよも。トシテハ秋のゆゑを
トシテハ秋のタメテヒツテアリ。もぐれを

ツヒタナリ。風情うちり。一
落葉の雨。これものあさめり。秋はタメテアリ。之を
見ハ又結のタマシテアリ。トシテハ秋のタメテアリ。
タマシテアリ。れもくれよ。あくせ
毛打り。うきよ。あくせとすと。まを。て。ち
むりくゆり

定家

○三のよれのうきよ。落葉。とまねふやく。とまきのを
せ文字。きく。なり。夏とも。秋とも。冬とも。春とも。夏
へきれ。とまきの。秋の。あ。秋。が。り。く。あ。と。よ。あ。け
ゆ。く。と。ま。く。い。く。と。ま。く。の。と。ま。く。わ。り。く。と。ま。く。の。と
よ。く。い。つ。心。あ。く。く。し。能。情。う。ど。う。か。と。ま。く。

なり。勢乃くも、鷦とて、とひきのさめう
事也。まごの事力あり。時々、多くを仕立てて、
名族が、とまのふとがた、たまゆるやれど、なまむ
務むしの心れり。されば、といふことかく
もと、雪のゆきとひよる。すすきと、
すすきと、すすきと、すすきと、すすきと、すすきと、

卷之三

のうそも本うそ
いふまでも

字居士閩白太史大稿

○秋の朝の霜がやしめんだけでもううるま雪はゆきと
かはて雪の入りがくちもろこ角あつらをとひ紅
葉は白いの雪よゆりとす、それからとあり
有色界分葉雪鹿無情羅井夕陽中

後成

つ物のものあらぬ色をもひ
り色うろもとあらぬうあらぬ
は色もは色うろもとあらぬ
色うろもとあらぬうあらぬ

月をもつて月をもつてのやまくま
月をもつて月をもつて

月をもつて月をもつてのちかうのくせをもつて

おも内記主

のゆのうすと音よかうねと呼鳴のひづれとくもれ
此あはれとるもと色けくねと心たまらぬのう
こううをつきといつあまくわたりの氣の徳を
の中ゆきじめいわひとと申す。色とくわくあるを
ものとくわく能るむちん色あくよそくする

津松義樹
何方可化身千億一樹梅花一方弱

又杜子美詩

梅歷寒苦發清香

かくうりくよじくは梅のあらゆきをあまう然
ふうりいせたくひたく有ふ人のあまうふよしれひ
かくく歌く極く極くうそひくにあうとうな
忘くくくよひくしくものとひくすやすひを
もまれうええ庶民よすうこのうらをされを
うきうかくと約とぞくとせらきくよろえます
をゆく風情りくうく盡よううれ

宋蓮法師

今うそなむひうりをうち先ぬおう月乗りありがのを
たのじうのと立教相通也。用教よもうてこをあり
今うそと云ひ公雁のうそんとそうきばかりさしま

毛毛の腰おのハなぞりむよ霞かすみの月の袖そでくろ
附つきうすすきの岸きしのあくをひくわゆ多きやうに
まことゆき心こころなきうらをなまうとねひと
いづり。居ゐものよりのま枝まえだうらをひくらむあふ。
感情じきょうづく。おそれさかまうりあをもせ

萬政左政大吉

○ぬつて今いまのらをぬの月つきともとのあくわに。毛毛
つづくとよ泡あわよ同ひとはの心こころうるとうをんあを
なり月つきと花はなとのあくわに。毛毛れりつる。毛毛
毛毛けふ不ふ充あま所ところ也。月つきともどくはくすくゆくと
いふ悪名あくめいとぞひくさんと辱はずす。萬政左政大吉本音
まこと毛けふあたりを毛けふ毛けふひだらまく里さとに住すやなづつ

帰雁きがんのうようやうりうは傳つたなる

定家

○若わかくの毛けふは毛けふも毛けふめのぬのぬうに。毛けふも毛けふうやう
御ご金きんの春秋往かほ來きの幸さい者しやくとあくまきひうらううらう
大儀正だいぎじやう

○ぬとこまのなまぬひきひ志しのつよつと物もののなまく
雨中春雨あめなかとひづくとつづくらうらうらうのまのなま
とはまの霧きりめやまのとたうじつ心こころとくくくよう
あくわくうらうすたう

伊勢

○ぬとこまのなまぬひきひ志しのつよつと物もののなまく

もの而よあやねりみづくと公氣あれをあくと
えくく、絞あきへ後減みづくとなり。水より絞を
う。ふみのきと波出をばまみのや化と感した。
「あら平也

柳と無氣力擦生を動池有波及冰盡用

言内鄉

つうきのあやうの下、未みづかとあゆう雪のひ消
ぬるひとまきがれ、船の氷の氣すうありけり
はうに季を感すうらあううなりと云続あれくも兵
馬のくわへ、さくらんばくの消すうてくふ
あまの車走ありく。そくへ歩うトヒテ露の
雪をくじて、まきをく。無氣の竹へろち

ほうとそのあこトノシとせくあくゆくうすく
あく、系のあくわくうたうとまくと
よめうううう

毛生中見

やかまきとまきとがまきとだまの日にはくとくたえ
うすの聖ひきかくやまうわくまのうまうくつむ
たりよハカムヤケモヤムモ歎ゆうセバテ
日とちとくのうううう、やうともと共の日み後
うすとくやうもととまはくじとくらう。ゆう
とく字の春日と半半やまくひとくらう。ゆう
せきとくらう。ゆくとく云御ニあくもくとくらう

物の道室あらうと云ひむけたり。ゆゑせたらもじ
し。まくセトト。かののすもひかり。うのとこの
御くく支へとす也。

雅經

○鳥もくもふくうきうあねうとうゆうをかきこひの内
裏とあくく。うきうのまのうお月をやとえ
あくうきううきう。面白うきうを
あくううううううう。月をあくうのううふ云絶う

ノミナリ

正三位秀能

○花等うきうのまのううきう。花の内海の
吉野うきう。あやうみうきう。丹後水の花野。

寺島乃うの天和せびうの丹後うのう云絶
あり。をハナミコホナキハ天和のうのうをひ
そく花とあらうううう。花はお銀のううう
幸うす畢竟

有象

○初日氣うきうの福とれまくきく。雪やうきう
くのうものうにみうちうとく。雪やうきう
きくも君うく。日氣よと極くことよ。桜く色
のうやうふく。うきうの花なう。らきくとむど
くとく。初日氣よとくのう。やううちうとく。雪と
くとく。うきうの移よつまく。くほぬをくれ
くとく。なりあき日氣くとく。ばくうく

たると云何なり。其の事はくわたり
朝氣見ゆるよてう月のあらはるを成らうに

春元下巻二

釋阿彌陀佛九十頃一徳一報屏

月小山の様子紙をすりとこうと

天皇

○極喫氣候鳥のまうちむろく一日をひぬ色、那
捨して頃どつ幸公十事よりと十年より内
所そこのとがるむく事なり。氣の聲を子孫が
承り。附西乃聲とオサナトモル事かりば
秋の聲が是より絶えなき一也。手邊の聞

御体のを也。門修正遍照寺七十軒。而
たる例也。依らきまく及
花の色を移う雪の色よりうむうきとくうも
せうす成集よ入ゆり。後故のがい達仁ニ年
八月もほ製の心は秋らを揚むよびてかのよ
もひ千万葉とよろともあり。とあそそれ
轟數氣のほめくもる邪く秋日を度むたり。深
良よ自多於このうとみの君をもみの日のそれと
みとをもうなと云泊りとれり。やくされ
ちうるや本もひ足引のじもの尾のくびぐれ
のうとぞれり。楊葉と木の葉のくびぐれの
さうひ出されくらううり。かくく一日をあらうと

句つひゆく
かみよしやまうす
おゆきのせ

情アリ

後成

○ええこのわら孫のまちうまのあけの
うい聖へ自びの御の花をうえ様をあらてよ
まほねとて海をくわうといひにありむの言
のくわうたるゆのあらは。このせのま
ともおりくわう面白ことえのうちこくそ
あひくわうとよひをりくわう傍をあかり
ゆくもよしとくわうえんむ事ハシミとくわ
あうを往せぬ情ありうだあり

熱因は附

○山裏の夕景をも見て入わの帰よれうらうけ
山の風のむきとよしとへきのよよものうち
あらねよれられとくわくがゆくとものゆふハ
れくねが山をすしめく。もしわらふうを
それのもらくのあくとくがり人。熱因
のうのとくとふうのあくとくがり人。熱因
もくとくとくのあくとくがり人。もくとく
のあくとくがり人。山裏とくくみづか入るもの達
もくとくとくのあくとくがり人。もくとく
あくとくとくのあくとくがり人。後継きのう
まなとを看れとめあはれがもこすのね察也

源興親

○あらもあれたのじのふれまきをひらうしのやうの、
はやーのひじーの圓すらもやまとよしもりとは
ゑどぞ大和のやーのとがひやく。そのやー^ノ
独の圓面のうらへく附くあれをちう比くうとく
附くへくうとく也

西行

○かみひぐもまきくあらめきひありまくうやーの、
後方於世のよすをもとそむせつてくらうよがむ
用心りく純至くく御まくされをがくうわーと
思ふやーー祀のとくくをせをゆうさんと遠
い者のとくとくうらうもとくそれよまのものよ。歌とつ

きくきくきくきくきくきくきくきくきく
金剛經よ應無所住而生其
心のこころなりまわなり

定家

○拂の塵の風あくまなうとくう人乃空きに見草
み文字拂りく大切うけたけうけたけうけたけ
毛うけたけのむとくゆよ後うけたけたけうけたけ
後うけたけたけたけたけたけたけたけたけたけ
本うけよ四うけあらうけたけたけたけたけたけ
本うけよ四うけあらうけたけたけたけたけたけ

家隆

○拂を夏うけたけたけたけたけたけたけたけたけ
ぶらのぶらの拂うけたけたけたけたけたけたけたけ

せあくのうりにかかわるるのよかや後から
そくまくゆくはまどをぞとすむ列車に
そめらむのうらむとらうまくもく。つまく
のうらむとらうまくもく。是のあうけうら
行ゆくのともやまきにいとうまくもくの
ひそくとらうまくもく。まれゆく。船を
旅のよううらうまく。詩人ひらのよをせ間を
ちへと車也

風はるよあーとをせよとまきをよひ
そくまくゆくはまどをぞとすむ列車

後浦太寺町大門

○それよかよいよ。楊枝をひらひらとせ

筆のそれよかようにあゆうされ
とも只楊枝のじとんとたうせ中のうれきの
とく揚のがみひよくとく

家持

○あくのうりにかかわるるのよかや後から
曲水裏よよりのうらやまくよ。或度地滑よ
巴水とくよあうたりえとく三月二日曲
水とくよあうたりえとく。詩と歌くわよ
といつ。水成巴字初二日とづくよまくよ
わくよとく折よのとく。もとづくよざくよ
わくよとくのよいつ

齊蓮

○おひら鳥、うつもとひしんがまめうせりゆうのよ
まよ、うねる花をうけりうてはるくもあつす
まうる鳥は興とくのうきのうりもくらうをひ
のくもゆくうたきの花の花の香よひくうく
とあく、うけいゆうあうとたのしてあからくく
まへじくれのうけうかみたのじことす。うく
ひよせんとあくれうをうそづくうなき事へ
あうのうふせあう。れふーとくまくとくす。
絶妙也古語云花散立根鳥歸回巣といふ

同

○あまきわれうの誰かれたもの花立まのやす風
は滿もと根がよまぬの花を立くらうとま

人のつこふわくす風のうをばくくとを。むり
くうじき難とくとくとくよゆうとつ。むすれ
きのようをりまうは色のうひあり

同

○まぞひまぞひ見かまくらぬと霞よあくち治ひ筆舟
まのう外とひ春のとくうの声なり。毎年書ひ
ひとあけうてとく。むれを伊川くとくとく
らるはうのゆくやかれくにじうちの織くと
あくまくううとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
さうたううとく。うくくくひまのとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

五と云ひり。墜のをすありまゐるどよひりつ本す
年とてはまくがまく立田所くれやれのあくをせん

藤原伊織

はあまをかよ人のゆきれつまをられやうとひきり
はうをくじるをとめかへまかくとものあうわ
まくにまくかへとくとくふ。まきあらものあらま
やうだうすよ囁とうほ。まきあらものあらま
うとまきや被くひらからくと。まきあらはゆみ
画谷と人のよづりの織りをゆくぬものま
それももの阿らハ思くぬこととゆくものま
とこのもとれりともあへーとたのむやよ
むそらうまをじかくまゆくとくさん

うりと心うりとくらくあくへ感情
極たまも也

稿改版

○はすもも園田とよ雅ととものあらま
花園ハまがよもくとくとくもろのハ怪れく
にとれの本れかうととくとくとくとくとくと
御都とばれとくとくとくとくとくとくとくと
あらまくとくとくとくとくとくとくとくとく
あらまくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
といつとくとくとくとくとくとくとくとくとく

○物が不思儀なり。古に傳云、主人心安樂、花竹等
和氣といつて。

夏奇卷三

急園

○おじとお年はりとおのをかうづくやまとと友多され
まづのことをとどらぬほきをまつゆもまつ花のうぎへ
是と年をもとてもの厚ち心をよがふ。枕心にう
かよううへりてりてりて。花のうぎとまつことひと
トとやまつことせ

武子内親王

○まづやまづとまにひまむひうりの野の處のあ

伊勢とくハ御宮被成やくハ御達と申せばつまも
いけるのやうよじなう。ひくハあまく内親
一人つてのせらまうあり。其處のまの内うち
をとゆくやうひかくひまくまもとぞうりうさ
うねの野の事とすれりやくわそりうさ
とまくともくと

後成

○昔アリキのよれの事の多くうとうやくいふ事

未
家致すとまことにかに筆を起りて事の
やうに文をひきよせとのれくはるの處す
後くもすすめの事あると心と一いふを
ゆうて感に終へ。がくほくとまことに店
をもとあくほくはまくまく車と思ひお市
郭の五くともすむがう車のとよりのさんすう。
あくとてくくもしおぬされし源をもくろむ
人よみとつとくお宿にとくらうたらうとくらう。
もくらうのあくとく

蘭省花時錦帳下
遠簷点滴如琴絃
在錦城歌吹海七
雨不曾知

半夜灯前十
年事一時和雨到心頭
老心用無外事
麻衣草坐柏空身
古人ハいつをも本の事と様うとちやふやうり

民部の筆光

○郭翁一とおはだひつよもうれきのあまのむくと
内もすわらんといつまもすりのとすも感にうれ
すうとすと見てくよ志のくくすすくらう
乃とよいとあくといつう老その樹と筆をいと
もあすり取そのゆくとくするく事とて
筆そのくととつうととくらうとくらうとく
ううの内ひくとく筆をうちうとくとく
ううの内ひくとく筆をうちうとくとく

なり。時多蜀望帝化。——たゞかよだめ飯と云。
也猶未り。とれもひつて。とれひづくもし。
——ウム。また。モテキ。——とテアラタケシ。
同友。と。の。サ。サ。シ。カ。ト。ト。モ。ラ。カ。カ。ア。
ミ。モ。カ。モ。ウ。モ。

家譜

○(本)家と取筆あまとの御名ゆうと思ふ。し。の元
は。よ。せん。ハ。ゆ。か。る。御。也。附。の。つ。ま。か。と。や。く。よ。ゆ
だ。と。思。べ。と。も。け。そ。と。く。い。ま。と。と。の。と。く。い。ま。と。と。
く。い。ま。と。と。の。と。く。い。ま。と。と。の。と。く。い。ま。と。と。
あ。う。ち。き。と。と。う。タ。の。と。と。よ。ゆ。う。と。と。と。
一。と。も。う。セ。本。キ。

本
たのめう。ぬ。よ。あ。ま。こ。よ。あ。れ。ま。く。ー。と思。う。は。よ。こ。ら。き。る
又。従。よ。お。よ。あ。う。を。の。め。り。、ぬ。承。け。ゆ。こ。よ。城。わ。を。ハ
と。本。う。け。い。く。あ。ー。と思。う。約。よ。と。ひ。ま。く。と。ま
た。と。思。べ。と。じ。い。ぬ。の。と。と。ひ。ま。く。と。と。
れ。う。ー。、う。と。く。ー。約。う。に。お。承。あ。ま。こ。よ
力。き。ハ。ぐ。と。ひ。ま。く。ゆ。ー。と思。べ。と。じ。い。ぬ。と
平。さ。ま。す。の。約。う。と。く。ー。と。り。と。ひ。ま。く。よ。せ。と
め。る。本。う。と。り。や。う。と。く。ー。成。る。也

西行

○(本)西行。と。の。約。う。と。く。ー。の。す。う。よ。あ。う。り。あ。う
か。か。か。と。か。か。う。と。か。か。う。り。か。か。か。う。と。か。か。う。り。よ。ま。う
ち。う。う。う。の。す。う。と。か。か。う。と。か。か。う。ー。て。か。と。か。う。う

萬ううとひきまうりかくう心から源氏より行の程
わのことをよびむらぬりせほすくめといづくを
そくゆりかくうりゆせほすくめといづくを
とどとづと遊ぶとまは是を源氏よりまくと
人ともまく事もだらうとよりてのへりやあり。
山家春曙
山家春曙さんけいしゅんしょく

かひとととすとみのまのまうおひととねそのあまな
ととさくととらうととまのまやす細あつまうおり

同

○ますとをまさせにえん郭えんくわと山田さんたの竹のむら立
山田の木と山田の山田さんたとせよせんとは
石船よせんとまうる山田のまうの竹のむら立

ヤトムラスのまふうれとまうすまとまくとせんよ
思ふんとひく下の、ころを日くひかけとまくせ

体勢

○いづくり田子のますとまう、かつて雲乃もまくねまの月あ
田子とまう、縣の事也。田とまう、月が、まくねまの月あ
まくねまく、ハビテをまくねまく、月が、まくねまの月あ
比のまくねまく、とひく下とひく、とくれゆく、月の
時が、月つき、とくれゆく、月つき、とくれゆく、月つき、とく

リ袖ぬくてもちとくらむうだりと田子はまくねまく

リいづくとれあすハ草苗くさなをむひゆームヒユウ—如本
リ早苗はやなとまうる稻田の面おもてとこりをハ幾いくなみうる田子はまく

基後

○極一ノ歳の終りよりも月更に氣をうれ神のまゝよううと
樹木小草あらば秋の声ありきともうそうねへてうりかうれ
えさうのノスヘトハアヒシテウラ神也

定家

○五穀の盛りのとくを活く種つまされのとく
本音立くといひをなやまことせよのとくをなれ
此本うのとくをなれ思はせゆうぐのとくをなれ
ひのくみにまくをなれしあるべー。せ間穀
のとくをなれふ月のばかりとゆめうあり。
本音ハ道りのとくをなれしあるべー。せ間穀
のとくをなれす月面乃りとうよどうすやうを

烹本田氏也

○育氣の終り伏がまくまきうけよ月をうへう期
月ハあよびひじよのめのめりされどもとみのれ
皆されど月すらいにうれざれどもれどものぬ
たよびうゆく。然しやまうと寒より猶う心う
後成

○稚えのれ梅よどひ出ますとひのくのくとありな
花梅よどひく。世人をまくわきをゑども
さうめ。さへありともとこれうひどひせんとオの達
なとす。代早下ちくとあらうう也

慈園

○船ひ舟あれどううううのふねやう。清川のゆくものそ
うう西へとれつまうくやくふるゆ夕暮るよ

と云絶不審也。ひりのうけあへるをも濟也。
ひりのうと便もへるよもせへる三つ乃是
作者のもの。

寐蓮

○船の舟たゞせうすねをやじまやれいせうのほ
たゞせう川のたゞうと云うり。波があわをあ
えれあぢうあくとく櫓かく舟をさすもあ
されと舟を自室かくすとむかうにようふ
ひそりゆとひり。波くはうくれくともく
あう舟と舟火のうきをもくならわあり。まど
くがくとくやうなり。詩うどくふ作と云う
は院のくくみづつとおとりひ出さう美也

○よしとんくらげ徳山附のとすをひくうとす
もくも氣味と見えやうてうゑよとくとく

定家

○あめ半なうぬのうの舟うよちもうてやまとくとく
各方半よゆひう里うれいひうとのうれじらう
桂の里はく。体勢うとめううううのうと
うれい月とくうかうとくとくとくふがくもうち
て家とくとくうひあとくとくとくとくとくとく

折政敏

○あめのうれひうのとくとくとくとくとくとく
業率のうやの里とくとくとくとくとくとくとく
門のうとくとくとくとくとくとくとくとくとく

体もつてややの者と今のへくよれがゆき
うのひこうとの

春吉燈籠ふ縛

○寒うれども行風けん松の聲く冬の夜の聲免
肉と小うちくこころすしとせのやえのう
りともとあらに原へづりくとよぐたとひのう
なり。稀よだくろくとひのまちうとがめとまく
ぞれととまく風よきとくろぎは只松をとて、
友の夜すうどのと思ひとくよおまくを

後鳥羽院御すよ

夏のよれ夜うすと林の風とじう松よわうとも
月をくね行のとる月とくまうねまとからむ風と

川 沢とハ秋ゆうとうを川ゆうの方ほのまくとけ 有家

新政敵

○がねと色拂へりきりと秋うすとくふやくう月を
みよより肩尾とくやう面白きとくきう妙の
うめへー衣とくわれをあくとよ月とくよ
うれとくよくとくなり

西行

○道の草木をく柳けむとくとくとくとくとくと
をとのうとくみちをひりよ柳の街よ清ゆの
かうとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
たらとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ぬ納涼の地をとくとくとくとくのゆとくとくとく

されやうにそよぐりてみち
とをさへ。御前をうけ、もうとつまうあま
アリ、めうぢどりとくさうきとありつき
やまに経てくらさんとひとももゆきを
のぎこしてうとうたり。さくらうとましま。
うとの経りとれやくすとよやうのをせ
月立とまうゑとくとくとくとくとくとくとく
月立とまうゑとくとくとくとくとくとくとくとく
月立とまうゑとくとくとくとくとくとくとくとくとく

月立とまうゑとくとくとくとくとくとくとくとく

清捕

○とのくらへく色あうえうを月を夕暮の西のふくらふ
あううはあうぶれ也。夜夜ひりとつてけくらり。

にひもとづきのあうゆよめけうるみのを
らひ納傳とまとひりきのなまとと。善氣
あうり。おととよまく一トゆう。とめつて
まくはくあひあくまく。とくとくのまなり

移政殿

○株うねりきびきよくほの海の島や下素うしん
秋いものとうまくとすうなり。とくとくとくのまの
なまとく。秋までもるりのうちま。まの経にあ
まくとくさうう。際のうね移す底くもめ
うねくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
縁の島や下素うしんひがたのうくとくとく
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

一也。あまきちうさくらもくほんためあり。と
うみたまーきのうの神也。とくもううりーをそ
そくくなうあそもくられやうなり
秋のうす。えのうれ下風よまよまのあれあまう
待賢門院源川よりあらわなり

後惠法作

○林生うかごみはるまのひつゆけうものと林のこらが
志のひつり。秋風のいまとえがくふねともく氣う。
秋風はうごみはるみゆけうものとどうよううくと
そりそりとまうせ

慈園

○象々うごみはるみゆけうのとまやゆけめくげあひの毛

きくハ一方なり。又ハ行。秋ハ二方とくうとい
合のをとるなり。ゆく常くくちうハあとの
ゆくにとなり
夏と秋とゆきのゆきのゆきうちよゆく常く風を吹
けうとまう

秋序上巻四

後速大寺左大臣

○うききく葉の里とむとまきのゆきうむちうの風
はう秋の何なり。山行うの風もく。一によ
まくらはれよなうかくよめり。木もよよよと
もせうらもなうなり。山行うの里にまくら

きなまつし山あうのまを秋よやうより
えぞくへそとけり。さるも風のまくと
めよかねくも。まほもくわくめうじとま
めうじとま

秋あると自らかふてねと風のまくめうじ

のよのぬをうのまく風よまけのれ、那のまく風

家陰

○耶日なまくと風ひはの國の生田をうか秋ハモモう
え不の中まを死のむりうとまをあり。すすむ
の面白とどしうもあり。耶ハ月本ハ雪をとま
すすりく首トアリシカシマヒトアリセ。
のうやれのアーチが声くあくのまをとま

ウチの虫のまくとあらまよおき。一ノ木
生田の杜ハムクアラムと風ひやうちうとま
耶々事セモとのまくよとくと風ひ。よし
ごうれよだまハラヒヤウアシモキモセ
御沫濁聲ううよ清流僧都

リ春モ風ハドキヤと海の國の生田をうか秋の初用
ちう風とまくよはまの風なり。桂きよ云景あて
ばの國のまくよ小島のん松樹にてまくよと
せりもよめりえ家陰つ

リ津の國は生田のまくよとまくよれ候とれ候やま
津の國のまくよとまくよのれ候とれ候やま

藤原秀能

ねよく風なきハ花りのちあくにうの
えひでねども秋のくふとひ春よそらまこ
ゆくなり

移政殿

○源兼が家のよすうちよりに里とれを秋ひよみ
今うまううしてまかとまく里とれを西うきま
はうの一句とテテテテトマウナリドスリアリ
ナリアラモあれど爲とたナリホうれを秋の
あうよみめり

左傍つ季通具

○あ行六ノ木のそん袖の處野原の風よ秋ハヒヨリ
身この角にくニテヨリモナカラ。秋の季

野原よハ風せ附かばよきハなみく霞やさく
むきうつしゆ也

源良親

あ行の枕とふすこねなり露とあらわれのま風
あきこまくはまくまく陽熱もろあらうせ代の
うひやるあらうくじらくとまのなりとそや
れのととくまくいいくくゆくとまく海がく
あらぬゆくめり。枕床とまくせくちくと
やとくよくろなり

頬眼

○小茎の草葉を落つてし羽根の初
幕ハまのあたりもるくゆくまくのま

本
らあかねのまきによ萬を林すあきうろむ
うらうれしむかく。さうゆるなり。長
の二まと深しとひ春のまき面にちやん寝のま
くらりそよしたなり。人の心ハむかてはらんしめ
まのたゞり。涼夜の舟へもつれとくもつて
ロハ一うも。圓い心なり。水茎のまくら
よ見ゆるなり

三
あまがまのまうち乃きかくとおのちうそや夜をじなうえ
翁のあまけり。霜のうりとまきとぞううらうり

西行

○あまがまのまうちあかくとおのち風をぬえ様の、もく
げあられまみが暮とよまきとあくとれとよまき

この事との爲といふ。おののまくれ萬うらうり。
萬の花のあらとありうてとくくく。この萬
うもくらうり。あられりうよおのるや萬のあらさ
うもくらうり。下にハ波のあらとあくく。又後
せうひむよううくわうやとの萬うらをよお
して秋風とすくじけのまく萬野の萬を萬
うり。萬の萬を萬と感。たらうらうり。萬を
うらうり。萬を萬と感。たらうらうり。萬を
萬を萬と感。たらうらうり。萬を萬と感。たら
うらうり。萬を萬と感。たらうらうり。萬を萬
と感。萬を萬と感。たらうらうり。萬を萬と感。

後成

○アラムニシヘト山田ホリミタスヒセハキヨナリ
ウシハシのモトナリミシヒキシテモ同幸ナリ。
秋ハシヒタリシヒタリシヒタリシヒタリシヒタリ
及秋ナリシヒタリシヒタリシヒタリシヒタリ

御銀の詩也

同

○森の氣をりまう、ひよくや松風の音信をひらあとがう風
まともハジカムモのあひあすと云ひり毛も
風ト、花との事也

小并

○セタの夜のマヘヤツセタセタアミのモレ、セタ
哉^{セタ}アミのマツモトシタセタセタセタセタセタ
セタ、まれのマツモトセタセタセタセタセタセタセタ

ト空からアマツモト松風トソヒケタラモナリ

前中納言匡房

シテ、森の氣をりまう、ひよくや松風の音信をひらあとがう風
森と、森の音と、ひよくや松風の音信をひらあとがう風のモ
リリハシヒタリシヒタリシヒタリシヒタリシヒタリシヒタリ
リアミ、森の氣をりまう、ひよくや松風の音信をひらあとがう風

大納言經院

○むかにとくちなぬ野^ノきく、ひのきうりり、ほうれ
はう經院^ノうりり、ゆう阿^ノもんうらうりがの國^ノ
ほけうらう秋の野^ノきく、あくもむかうらう
エ^ノく、郊の^ノきく、心^ノこめく、何^ノう
えふく、むかうるもん、かうり、日^ノのうちハ毎^ノ首^ノ

やうに翠のから玉ともくらべがまとまわやすく
さよひうちよりへやうるくゆくはお今に
やうせきうちもはいとひくをあえ
心のうちうとうけうれとひくとよ心をあ
あらうけうなじくもとあらじま陰うす
木鳴なき夜船のうきなまつうの月とよろざ
うれしのうめんのう歌つらうとよとよられ

名詠

○おもそかと思ひ被せれまうあうりあくのを
おもそかにもじとあとつ車とをくくいあ
只あそかの役かくわくたうと、そんためぢり
ゆくはまかくとよううれしきくわくともくえ

つくどくみまくらまくらうにま
竹籠をまく權のまくらまくらうとまくらにま
てまくらうナリ

人丸

○この秋の入野の鳥も尾花いはういはれまく
は秋の野の色に見えられあひく。ものまく
くくくくとひづらううくらばはくくくくくく
の野のねうううに聞くハのうう心をかく
りとすとくとくとふとがや、いつとやうよ
ゆうんといづらううくくよとくとくとくとく
うくくとよとよとよとよとよとよとよとよと
うくくとよとよとよとよとよとよとよとよと

リモアラリモアラロアラモア

ハリヤーを祚シヒヤロウサ本

リナムツツカムのキトシテテナシハシル

武子内親王

つ花落ミシテ落アリヒニヒカタシマシヨリモハ物の落アリ
本音トモリハシテシナメーも落ヤホモ秋ハモリツリ
花すき袖ヨリシナリシキハガシ心シナシヤアスム
リモシハシテシトナリアリ。後ヨヌ爲也モカヤヨ
出ルモハ感情シハモリシテ仰ク心シカヤマス
ナリ又トニテハギシナリアリ

慈園

○此は落葉ノシテ落葉ノシテ落葉ノシテ落葉ノシテ

リモアラリモアラロアラモア

リモアラリモアラロアラモア

リモアラリモアラロアラモア

リモアラリモアラロアラモア

新古今

○森の事よりて家の物よりておもむく車との事よりの事
をあるくへば内を外よき事よりものやしくあれ
あり。此物の事よりがよき事よりあそれよりの事
又はひあら事よりとてやうはめのなくとも
けも。まくとももじて。物まちつりらや
うよれりうれく。まくともおもうち事の
つとおものうれ。森の事よりと思ひにあ
そそくれ。そなり。多使西めされはま
を後京極殿侍の事。今く。多事。とつま
たる事。かほにくわはづくやまと
とくやまと。ものなり。をうんとのりよ
みゆたるよ。秀をだり。神の付えぬものなり。

トとてまこと切るまこと事より

四

○まなびて。あ焉や。紙よ。たる。まき。れ紙の文書
紙の中。せり。也。かよ。く。うれ。と
し。と。ゆ。も。か。これ。も。紙。と。れ。し。焉。の。
あ。う。く。う。り。これ。へ。紙。の。タ。ア。と。う。も。と。も。も。と。
ど。の。感。よ。ひ。れ。と。ま。と。紙。の。あ。れ。き。う。か。
不。亂。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

卷四

七

〇かの後やいはう秋のまきんはまく書れよまめのを
タテの尺もとまくせとハサトアリ竹のま
なまくらがと空よしとつまくらむすう

西行

〇おとこにあれとまれむ鶴をとひあとのまれ
おとこにあれとひをとのれく六賊をとひを瀧
をとひうりゆれむ鶴をとひを和わやな
うみうどじくと重くす。それむ秋の夕ともあ
る。鶴のけいよ鶴のゆきよみくタニのあこ
鳴きよがたとおうもとおうもとおうもととおうと
かくくやくととおう。羽よとくいれもととおうと
りひうて。鶴のけいよの夕の夕れがやまくと

かのこのされと鶴うらもと鶴うらふひくぬ
おとこにあれとひをとのれむ鶴をとひくと
やくねりうくとあれよとひをとのれむ鶴をとひく
鶴あり鶴正祐安後吉社す前日氣絶あり
あゆの神の氣絶をあくまうとれとれとれと
しは儀もとう儀うとうとうとうとれとれと
社す前日氣絶ありとれとれとれとれとれと
前日氣絶ありとれとれとれとれとれとれと

尾上

〇おとこにあれとひをとのれむ鶴のをとひの夕れ
けくおとこにあれとひをとのれむ鶴のをとひの夕れ
一年の内つづくとれとれとれとれとれとれと

うすよらむうううううう中よましハ多ヒタメ梅柳
楊柳よりゆく。海道ど西の處よらうた。所
曰阿多モシテレ仰り。重宗アミテラム。

里モヤリの内多ハモの暮春の中よりわきりのうち
夏をハ美キモヒトク。やれと云ひよいも
アホのあくとくめく。多くのも笑ひよや
もう月の朝さやう。梢のよちえをうそく。おも
ききのうとうり。うつ車ハアリ。と早よ移
夕暮。うつのうのうをとせり。わが勤をばくよとゆく
まことと感へ。せ中ハうとうり。ゆり。ま
まをり。うつ車をかう。お辞をせらよとゆく
まのなもハ。まくはまくのまよのれのうを

ナリ。うづひきくたるうなり。ス後むね葉を
ミサク。うづく。だり。う。秋の葉をもとと
けくを言後西の申。ハト。セツヨヒシキ。う。
ものとくまうり。かくもきぬままのやハ。あつとく
すや。咲き金色を。聖人のひとりうき。柳よくわ
叶う人間万事。あく。波あく。うと。うのうと
ほくうう。うと。うと。うと。うと。うと。

蘿原雅經

○またやハモシアリ。うづみ。岸のやとのあと。アモテ
黒いあらじくの者。よがり。うひ。こわす。地。アモテ
とよきの思ひ。あらじく。岸のやとの。林の夕。アモテ
ちくく。アモテ。アリ。と云。一絃也。アモテ。アモテ
ほくうう。うと。うと。うと。うと。うと。うと。

まうだくとやうちがお拂金殿うちとまうひか
朝一とつまんひくまうあなうやうくとそ
となねよやうだくすあうとそ秋の夕暮れ
まくとやあくさんとそもあくゆり

式子内親王

まくまく首をわらぬ秋風まくまくとそ秋風
秋風むしのうそれまくまくとそ秋のやうにそ
あくぬとそり。ものまくまくとハラキシとま
まくハジ一と今よなまくまくの心すり。もくり
まくまくとそりのむすとせよねくよめつせ

和泉式部

○秋風まくとそりの秋風まくまくふきほうとそ秋

まくとそりの山うれしもまくまくゆうりうりとそ秋
うりうりうりとそり

右清流通見

○深き山里の山けみの山けみの山けみの山けみの山けみ
山けみの山けみの山けみの山けみの山けみの山けみの山けみ
山けみの山けみの山けみの山けみの山けみの山けみの山けみの山けみ

後成つ女

○おあきのまう風のまう風のまう風のまう風
やねあくまのまう風のまう風のまう風のまう風
人のまう風のまう風のまう風のまう風のまう風
あらまう風のまう風のまう風のまう風のまう風
まう風のまう風のまう風のまう風のまう風のまう風

そろそろむなりがやあくと後口傳たまつて
すみすみととひどきハあくまくとひまくひかり古今
の言ふくまれをひきお殺がれたのをなづかぬまうきされ
たくらめう向へたのをなづくうじにとづくえ
おぐく。おもてへかくしてたり

おもてうらう月の秋れがつてれ秋ハまよくなり
おうりきの秋下ま老めれハ鶴毛すこすのうき
因かとの月ハ感情ゆくをものなれど。うやうの秋
の月ととゑうかくをゆくととくう。並ぬは作自
書よ月ハあうかうかうとくうとくうとくうとく
後の雲よりあくわくわくわく。又燈うけくちう

月よ心をじとうをりげなくおもてくおもてくおもてく

ちうくいぢう

左邊參通光

○むす野原を秋のうらう月のすゑよくらん
ばうあうれまねかくいぢうされととづかう月と
とうじゆの奉教一へはなむり者どううを
なまじきのと後うらう月。後京處はる
おおみをひくひく船よ葉の葉うりおう月うけ
かくらうりうりひくひく。船のうそをあまと
くとれのうそをなまことづくらうとくあらと
へば秋の音中。むまくへる葉の葉うりおう月うけ
よまふ心をくくとくとくよまくおひくとく

てこそせぬぢりへうとよ此のあまがつづなむ
ねうろきみづうあくととなりづうなう風とほ
りあやうなりゆ風の事う爲くんとすあなり

無因

つゝ月とう源うて月うかう秋まもをそを枯ううり
走脇のうたりば門すとうとひの比までう
なうれすうえてりとくあきの秋うりあをと
ひうととくひの秋うりびりうりうりうりうりう
月とすみくうくうくうくうくうくうくうく
月をすみくうくうくうくうくうくうくうく
月をすみくうくうくうくうくうくうくうく

よあう

或子口祝玉

○なあ寝候おうちかれやともれはるはる月やすと
本字おうちよ宿を立てくさうじきはいのと秋の多書
なうめよしわが都あくこひきうら心なり。ニシテ
のうちいづくを秋うくへゆくとくのうれん
うれんあづき——まれに仰めどしわくなら。野
毛ふも月のなまことひうるゆ——とせ。家う
けよと仰までも出あまの里のうれんと思え
えうのうくひすく

延川院涉う

三毛源内うかげ雲アトトウひうり馬うそくうらの月
安徳といふ日本の大名也。うそく月とくと鐵下緒
の事を云う。八日九月の月とと結ゆりい

廿二三日既と下弦とあり。其の日を以てよりみあせり

後三位左衛政

○あひとれき能見を方仰りて吉聖のたまの月とぞも
そよそよらへて行の事たり。ふ伏の事くづけ
をと云はる。この月の月ナリ。月伏
詫うる。されどかよきくよろとよろと
いつり。能もとんの月ナリ。下の月をとす。自歎
のやうなまゝの月とす。月とす。月とす。
よろとよろとよろとよろと。やべりぬくねむね。始考乃
あらむ。うきや

重家

○月をさひてあくね矣。うきの月。北雪にうちもえ

秋のよけ。まつとくらふ。遠ふ哉。のよけ
ゑち。鳥のあうといたくとく。えよ月
とも雪とももぬと。なり。どうひとあくわ。

ぬと。ぬと。なり。古持よ

天山不弁。何年。雪合浦可達。旧月珠と云ふ。舊
もあく。うなり。月とぞ。雪とも。もとぞ。と
作ふ。うり。

後成女

○あひとれき能見を方仰りて吉聖のたまの月とぞも
本書そよそよらへて行の事たり。ふ伏の事くづけ
をと云はる。この月の月ナリ。月伏
詫うる。されどかよきくよろとよろと
いつり。能もとんの月ナリ。下の月をとす。月とす。月とす。
よろとよろとよろとよろと。やべりぬくねむね。始考乃
あらむ。うきや

務政殿

○まのきとらはるはれはれはれはれはれはれは
うけよと云御字よりく心うけりゆり海のまへ
あれとく映の字ハこかくたりはうハ映の字也
萩のあくにうるさもなくもじふと思ふ
ひよくさむくもじふと思ふ

○のうかくのうり。このうの夢々菴の素總は弱
らす一車あり。駿^まハ月前草花也
は作中のう多銘肝膽車あり希有^{アリ}

同

○のうをあき高人^{アカシ}色せくみの日よあき風うるく
阿^{アカシ}をあきとくのうとくあれと云御うり。首の

○のうかくの高人^{アカシ}色せくみの日よあき風うるく
云うなり。珍^{アカシ}うとくす

同

○のうかくの高人^{アカシ}色せくみの日よあき風うるく
けうれとくよううれふらはうとくうとくうとく
唐のぬきやくにくのうとく。いとんや深山幽谷
の月うとく心をあきとく。修行うり。行こうと
走ひのうとくなり。駿^{マサニ}ハ你の月うとく心おりを
きくとくとくとくとくとく

宋蓮は昨

月と暮と年れを作り。北斎をうとく。私風うとく
絶^{アカシ}のねじうとくをよくして月のを

うきもなきとぞまくさむと私心うまくす
うそせよめり

鶴長明

○傳わふやにまの里す月はやうかわらうのまねの松風
ちくしきはうきうかきこととをりす。やうすくま
おひのの松すへあくねど松はゆくとま
いつうとがおふわくはりくく月よまくま
風ふまくわくまひくよゆくとまくそろす
にゆきをまくうきうきう。キニと同やうされす
本多とるつとくぬすあり。月それとらくよや
うすくえすくハあまことと云ふ事也大江國房豊すよ
うりうりに心のうきうきうちむとまくすやあまん

光毛もとあまきのまくろすり

藤原秀経

○風のあひきのあひきによひの林をまく月をまく
林をまくことといふ不勝有也。林をまくはまく
うきじまくまのまくうきじまく。林をまくはまくのとよ
あられは角とよひたまくもまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

宮内少

○心うりうりぬのあま此種が月やとれとくめられぬわう
みのうりうりぬのうりうりなり。あまくい心たまく
のうまくまく。たまくとめくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

うきよへり。うきのまこと。口つひゆ。おとくや

光明

○松島や塔ノむぎは秋の紀月ハ多の杯よりひのまことは
物静一紀月より月ハやどる。とくとも心なき
あさのもぐくも紀月を月ハやどる。ものまう
そよより

毛京毛辰輔

○秋風の柳の音の落すよりましれやう月の朝のまきと
雪ましよりぞう月とぎらぐと。一ノ木あまくまよ
えゆづりとくへー。青天自目す。月のまくが
まくのなり。大過す。それとてにまことる煙也

道因法師

○山の木不雲のよこぎりひの木葉と月ハ松ましれけり
けぬねと云は眼也まくと月をぬゆくう。
くうめゆーたのよりさやうよゆくうよ雲
の一ひじたふひまくとまよいもん方あー。まよ
ゆくうくう月のやねまくとまよいとをひづけ出
まくくよ雲やくよアテとすりてろとよもくひ
たうーとせきをけりとまよーなり。まよとまよとは
一ひじたまくうりとまよーなり。まよとまよとは
まよむから。れ改ううアリ
徳のやう月のまよとまよくうあまくのまよを
あまく内歌也

○者があまくを絆のと月うかのまちくをまよのまよ

上の心もとひのまじめにむかへりて
らぬ月をくわべゆきとそもせあすく晴
天の月をなうえくはのまちうと月よりう風を
ゆくわせどすとなり

持政殿

○雲を風をひそむれお風をねよのうて月をくわへ
月より雲のゆくさうと事ふもうなり。雲とハ
秋風をくわへたうなり。雲をそれと又ハ
秋風のまことわのく多よのうとそも
うのうとも一月をくわへたり。かうとよ
きをよくく秋風がゆきものなまきも也。
かうとい雲をくわへ雲あされを又秋風を出

しれはるひのうきやうとうなら

同

○月をくわへるのをれの月のまくねねの風と
月とほと月のなはすもうちうくさあうに感情う
きくさくうもあう心りくそく。とれのうり。
心すや秋の秋の心をもくね月のねりうきよ
ううとくもくうもくぬむくうり。あ
くうのうのうのうや

三内郷

○月をくわへるのをれの月のまくねねの風と
ひく風にびあくうもきあきハズくそくうと
のうきへきのうれくわくうあくうのうきう

里人の月約うとどひやちるのおりへるをこう
式子内親王
○おれき坐まゆはいとく廢ひとたまうあらむ後月を
書船のうなづかゆうきのまなすくまわれ
を船のうりくからうとよろんまうらし船
かうくとくいきのまなすく船うち月を
さりくもみのむりくとも花より月の訓をあり
おのきのくくされとぞあらじよもく
哉をうひきよもく心がたり

太上天皇

○れの病や祛よつてむほんせ零あすやくう月れ
ひくとくふつてとまま事力うど乗あすとくこの

長雨も退屈せとま事あら原也
書く虫のをめまうとくとくとも乗りすあら原也
ひくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ウリの水の水の水の水の水の水の水の水の水の水
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
なまくハ月色りよくあえがれよひうりとく
あえがれ月とあれとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

通光

○文よ文をたのみとゆよき月はつきとれ船の夜を
船の水乃うみうとくとくとくとくとくとくとくとく

あくさんすとなく。やうへよあげきとあへゆう
よ。がふみんうくみの月。わづかくとみります
えりとからく。いつくすなり。不詮村のあとうと
声のうきうきとさくとよ。スタのうきをえま
思ひうくさむく。月のあつらやまもうちなり。又の
従事をたのめ。いつくはれのよもうちとせーと
さうとスタのつづき。うみとと思ひく。秋の秋の
うみとまされすくなり。たのめとくゆとくうきの
あくさんすとなのく。おもせすく月の
えやうなりとまうせりのけくとくとくとくと

ニ院後

○大典祭の禮の處をくに雅和よりある月の月

大方とまよ二極あり。一月へお拂たまふだくハ
十のわハ九とま心なり。又九一月とま心なり。
せうハ九一月とま心なり。一月へお拂たまふ
の様まわれぬけとまのうくひづ。一月へお拂
まをの月ハやうへんとなり

雅經

○まわれぬきとまの月。まわれぬ月の神りせまふ
やうへんやうへん心なり。まわれぬ月の
の一月とよ月のやうへん心なり。まわ
まをの月とよ月のやうへん月とよ月の
一月とよ月のやうへん月とよ月の
まのとよ月とよ月とよ月とよ月とよ月とよ月

あつたま

舊書

秋景 卷五

家邊

○ト繫る向うの夕暮れをまかせひとらん
ゆきくやく云ふ感想がたり。志のね
下がる向うの風景。うき緒を経すわぢ
し色あとのぬくまく心のあつまうのあくわ
敵だらうなり

匡房

○事あつたものだらと然あればさむすふわく風うゑ
秋のうゑとみま車はまくのりととよ遊^基ハア

せうふれどもあても難よちにゆけ
とてやへひきみてごくは被りよるくと
車のよ細りうそと思ふくらうふほのゆへを
な。只秋風のうちうくらうどり。まじア
歯きだらうなり。秋樹の風情^{けい}を

俊惠法師

○畜生^{くじやう}もすゑつぶがくあにあくを廉のくわくわ
み文字のひらみちの道地をいたため也。閑^{かん}
氣がもうとくたり。もうハ筋あくくなりて、そ
みちをうちの筋あくくらうりのなり。うくわ
みふ宿^くハ、荔のうちづき海のへうり義也。本^も
ねうり。是秋^{しゆ}のうりやうなり

奥ゆかずかくらへて康のあまくめうれうれはや
後惠ハ人よりお酒をあくゆよ只もハねまが
されどやうされゆりトとあり。強る後惠の手で
おとせきとおとせきとおとせきとおとせきと
酔ゆかすよしとおとせきと。傳達より先きの邊守
やう。福心の人とて後心にそぞりハ敵も死也。
いとんやとんハ真地を磧く階とのりうとく
えくと過たうとく。もと前後惠あみた首ひ
えくとえくとえくとえくとえくとえくとえくと
えくとえくとえくとえくとえくとえくとえくと

匡房

○然れどもその間とておとせきと
は云の初秋のやうな風とておとせきと

本ハ半枯りの草から枯れ中枯半てハ風の
あともよきとあともよきと。枯もあれどこの成
竹と。室の草とをもくからうる。風の
あともつづくければ、じととむだまくわく
なり。やくせくうひと風とあせくやまとくう
そくかく。あすへりとよだみなり。がのうろ
りのれりとくなくまくへびりさんとくろ
えくやうにふれうるおと。あとく小松育やく。
ひとひるのれなり。或ふ
ノ門のれくてのひよ寝ておとしに累略うとうがち
ル。又うめのじのれりひこかにまち方ほくらとおと
はれくがおのまとびくもじにさくよやうのま

○氣外の事多きの事なり口を因ハシテ君はとと
御の所をひす。春の秋乃事一きぢり海く
鳥をもよがたりやくへ事本れをつゝも
ゆうのあたまもくろをとと因支色は早田ア
霜とく殺。物もあはなむとをよもかと
心をととのひとつてけふとく。初秋の
小舟トク。一役より圓まはなりく。うと
君ハシトモツツの物もきの物也。物の事
ともは因ハシトモツツ。初秋の心面白く。石縫
風情をもつ。木瓜の形りて毛もあら
うそ也

車蓮

○おやよけう露をもひきは風をハヌシ。ぬまのとは
あはくやく。萬とす。萬とすものハシのとす。萬と
すらしく。萬のりのりのよとくがくを。下
白面白き。萬とす。社風かけはからくもあらむ。
又やぐとくゆふらき。ぬまのとく。下向より
上向へうけくふく。船の萬の後めうどく

家陸

○風の萬をもとよね。萬をよねひきよくせうわく
すくとよあみく。びくたくとく。見あつは風を
風を風を風を風を風を風を風を風を風を風を
風を風を風を風を風を風を風を風を風を風を

うきくふうありばとてまゆ待の心よとひゆ
本手ア)

本手ア) 新古今一

經中納之云總

○まろねの事あきらめらぬ夏修みしほすをも
経みハリモトカク、放うひ山つじいりくうきり
あさくハモギナリ、もうぬ夏ちへねねりうけ

楊政殿

○里があまく月あまやく夜あまちかよ夜うけう
月やあまのくふうの中の西暮にく名の候あま
又の年の暮ぞひこそりくみきハ昔すとせ筆
あまくくわうよ月けうらむかくもむるく

○月やあまやく月あまく夜あまちかよ夜うけう
あまくうる里とくくとくすく、ゆくりへと本
もゆくとくのくわくむとくうたう心づくみ
あそれからうらかく秋の東へいねりくある。月
よむひとかくうれしとくとく候のものまち
とくとく、西暮の事とくとくひ、悲むるも
とくとく、悲むるもくとく感傷くうう化すあり
一たう心面白くや

立因つ

○唐もと傳とされまといがおきのけ夜月ようつを
けうのすがうだらうのや、あもまううとくとく
うよあくわまで月をくくらして夢をとえ
一たう心面白くや

定家

○秋之かまきりと重ふ月のみをもあらむよしれ
月をりくらぐく秋のつゝことよすきんと思ふす。
ねぐらつゝに本がうりく月のさうかくす。
秋のさうひごとく思ひてなくさきんとひるを
せしとよきんといつ。さくのしきくどうぐく。
やうく秋をさんとすりやよ衣むすものもやう
よえりとまけも秋のうそハスリ色るものあり
といづやうよそともあやめくちくらみのうゆく。
いつくまくにりうみあかり。あやじくとくへ和絃
いはくまくにりう本も

本間秋のう月のほれに心にうの秋、まなり

経信

○夜よ夜行とハシくうやなひのそらみ色あまてけくえ
はう森ぬさう古事と後まよひくこれの色是及林
よひくよじ事らありりよく事ひり
小半の星前横旅雁南樓月下撫寒夜
詩とももよまう。底をけくうとま事ハはるわだ
よが外くとくに歎こそそよめり。底をくハ松
の色をなう。さびのそハ宿の旅よひもへす
旅なく人よおどより

式子内祝玉

よひうつきのまかまえてわぢよ地の多うきく
は夏までくいつく骨もなう事。わのうとの

あまり。花落葉と歌起とふるのよりなり。然
歌ときには秋のつゝことを、と、うふたもどる。
うづくたゞみゆく風流りすよどむこの春
のるへといひをあらゆ。ちやこその夏とまうる然
夏とゆくといつり。あうこうこうへらひてす
なり。かくひとい只ごめこのあととつましゆえ
もああり。ごくくらむ宿あうよめり。感情をよ
くいくん、あすり。う信通のあら也。

八月九月二十七夜千声一力声^{アシガラ}至止時^{アヤマツチ}スの行ひの秋の
音^{ノイ}みよナミクルひきく。御^{ミコト}うちゆくろもて。
さくら音とさわとのしらす。さくらす。さくらす。
もの思ふ袖のぬくらうとしる。辟^{ハラフ}と云個の袖

の音よとくらす。ひうお音なまは笑ひの声^{アヒ}
のさわこの袖の。あそび^{アソブ}あやうかる。よめり

定表

ひうわふは筆の筆をうすおゑゆりの本の用^{アケ}
是の山の山の尾のまくら尾のまくら。よと
まくらとまくら。ふきハ唯^{アリ}確^{アリ}をみてねま
まくらとまくら。ハウジマクル。ふくまくらくまくら。
霜玉高^{アカ}よりハ月と雪^{アシカ}。おののがくと
るをぶの尾とづり

寒蓮

つ村の夜をゆきの枝のとよ素立のりうれのタぐれ
材^ハくはうじくとありそくゑやくのりふ

写すもくらり又七月あとう八月下りてもうまのから
せうとくらるまく角す。モ村のサトウリ
もう森のひこうじゆすとゆくものとのかくと
林のきーとの止所をかまくとまくすあり。トメ
心がむしの薬あじ様のことをされど。幸
運かく。感情をぐらぐらまくものうつて一時
ひく氣を毒病の状とくらうよとま本うへえ
のうんと風虫のう。

丸行内船場

○もうれしお風流くがうりよ誰うねのうをくへま
たじねの秋くまゆく。被ぬうちうり。ハ船
もうきのぶつまむをものうのう。船を

えりゆうはづくちとれ。よし
よすを紹とみやと思ふと。おきよ成り
ゆく。おとくよしゆく。ゆく。おとくよし
よすをとくとく。ゆく。いなき。おとくよし
とくとく。おとく。せれ。くわうりく
難とく。さく。ハヨク。くわうりく
りひき。だらう。おとくよし。おとくよし
とくとく。おとくよし。

主く持改版

ノ宿ゆくあくとく。おとくよし。おとくよし
日有家旅。一とく。おとくよし。おとくよし

燕園

○秋とくあくとく。おとくよし。おとくよし

もつてより余事はあれからむちう所よよりかくらり
本年よりくねりとせくいかくともかまへば成る
野うきひうとせうとせうにあやハモウトシム
とつらあそれうううううハ年よりとつら
然うくとといつらせうせうせうせう
あめをえくとんぬるなりあくとくも成る
汝すとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ほれりとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
じとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
なまき宿山とくとくとくとくとくとくとくとくとく
あつとも虫のなまくとくとくとくとくとくとくとく

通志

○金もあれば尾もあれば誰かとよつて
林繁の尾を今日少しあげて來るなり
のなりとさうして船のうがねがねりけり
とまくといつともう

○林立ぬあけやあああれさうくまやうけとむよもきかの月
蓑色れはきうけなまきハ松のくちふなうけ。あああ
さきりてハ曲とあくと。さきりくよくよくよくよ
あうれすうあうれ。のうとくともぬあきえん。曲
をききのうり。さう。すとわくらう
ききうれあたうり。うりやくふく洞ひ蓑とや
林立ぬさうにまうかまうかまう初うり。順逆流

沙夷よ

川あややかなものあらむとみよまきつのいの高んえうすと
春風桃李花用日秋露梧桐葉落時けんも西
一うき阿うみのそく阿うとよけくいづ

折枝歌

○蕃柳が高木のこじうむすき宿りうを種
さしーうの春うーとまもひすや。そーのふも
の尾う。ば二首とすうあくへばうるわくもか
ソウシキおとすむとくとくわんとよき

燕園

○ねうたあそちの高カミの月をねう、ううう皆
玉毛のじうなう。まうあれ、心よまニまわうもと

○ひづく月をかきはぢきとくらう。それとねう風
うううとめうとまうくまうく。佐よーくとくうま
まうくまうく

宝文

○木のぬ波うまう川うねうせうせうせうあく
木のぬ波うまう川うねうせうせうせうせうあく
うううのうう。川のうううううううううううう
波うのうううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううう

宝文

○木のぬ波うまう川うねうせうせうせうあく
木のぬ波うまう川うねうせうせうせうせうあく
うううのうう。川のうううううううううううう
波うのうううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううう

詠西川は素ぞれへかくめうりてハ源ノミヤモトさん
是モトク。家陰

高瀬すらとさううを取里てそれと中やもえ
さくめくふかくよみつる音めせきのつゝくと
ねりと附ハ吉田川よ源とあくうとく。じきのちの
なぐれくろよまちのうぐくびりくらがまは
あくやよりくゆくとま。村根からうきをう

式子内親王

○桃の木をもがく成みまくす人をもとあきと
相ハ初秋よ成る木のめり。一葉あくと木ハまれる
の事なり古詩云 楠一葉落天下知秋
春風桃李花開日秋露招相葉落時ばくをロリ

ツツミムハ暮秋のむせ代相の一葉落つうらひ
やくやくとどれとじくらくじくはなれども
さうこのまへはるく。ゆうよどく。ゆうよどく。ま
くもく。梢のそびりあつまく。がくもく。され
くわけゆくやうとく。うす人をまく
にうらむひゆく。今くしてこのくらと
あくよく心とまく。うす人をまく
きれそくうとく。うくがくはまく。うく
すまくまく也

西行

○ねくらぬくらうおまくかのねハルすまくしん
け金えむおれやね。おきはがうわかれとまのね

未詳語
じつこくあらなまきばかりゆくとるなり
さくわすしんとけりひゆく也。とくも
とみうくはくはくはくとくとりてとくのれおも
マクー先のまきをよぢりめがくよるを
まくわくものそとづきうを風すまく
さくうひゆうなり。はすとくはくはくはくはく
まくよりかよりかよりかよりかよりかより
誰はてあらまくらん山里れりありきよりのまのを
おハシのやじうなうへとすとくすとくすとくをと
いつまくえ別のを

指政殿

○壽永の日の秋風よまぐれといふのまぐれ

今ものうちとはま枝のうちなり。さうじへ
山のましまなくて。への袖をうさんどきとれどき
ぐうとれどき

